

けりて延方の町小若く船をあれり教まわれり船より下りておぼ
かぐりて常陸持せ板久の道を尋ひありけ道付還りてゆき
此人すれりまが洲に人あひくして左のたをけりて林を越て
武里許もゆけを板久の水つふ着く地と赤色いとあづりふく斜
かた十二の橋とありて西湖の六橋又陽彦縣の橋と長サ南七
式丈橋中高くして虹の形ふ似たりこれとあを比して風色の地あり
家居を河の中へ送り又船打とてあふあにのりてまゝ繩をひき
を俾うて川の向うよりあふあよりいりて豊後へむけ流るれ
所なれどいさの都念の地とありて遊女もあつたりの宮神傳
ふ是れだの川の川の音風つたきけり

人志神あやひやわがと戸垣の中あふあよりいりてあふあよりいりて
あふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて
あふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて
あふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて

て起もせだれもあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて
あふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて
あふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて
あふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて

組風

都くはあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて

牛馬やをを里又潮来とも書ん

小湊よりて町に五所ありあふあよりいりて

これよりを里よりいりて牛馬て所よりいりてあふあよりいりて

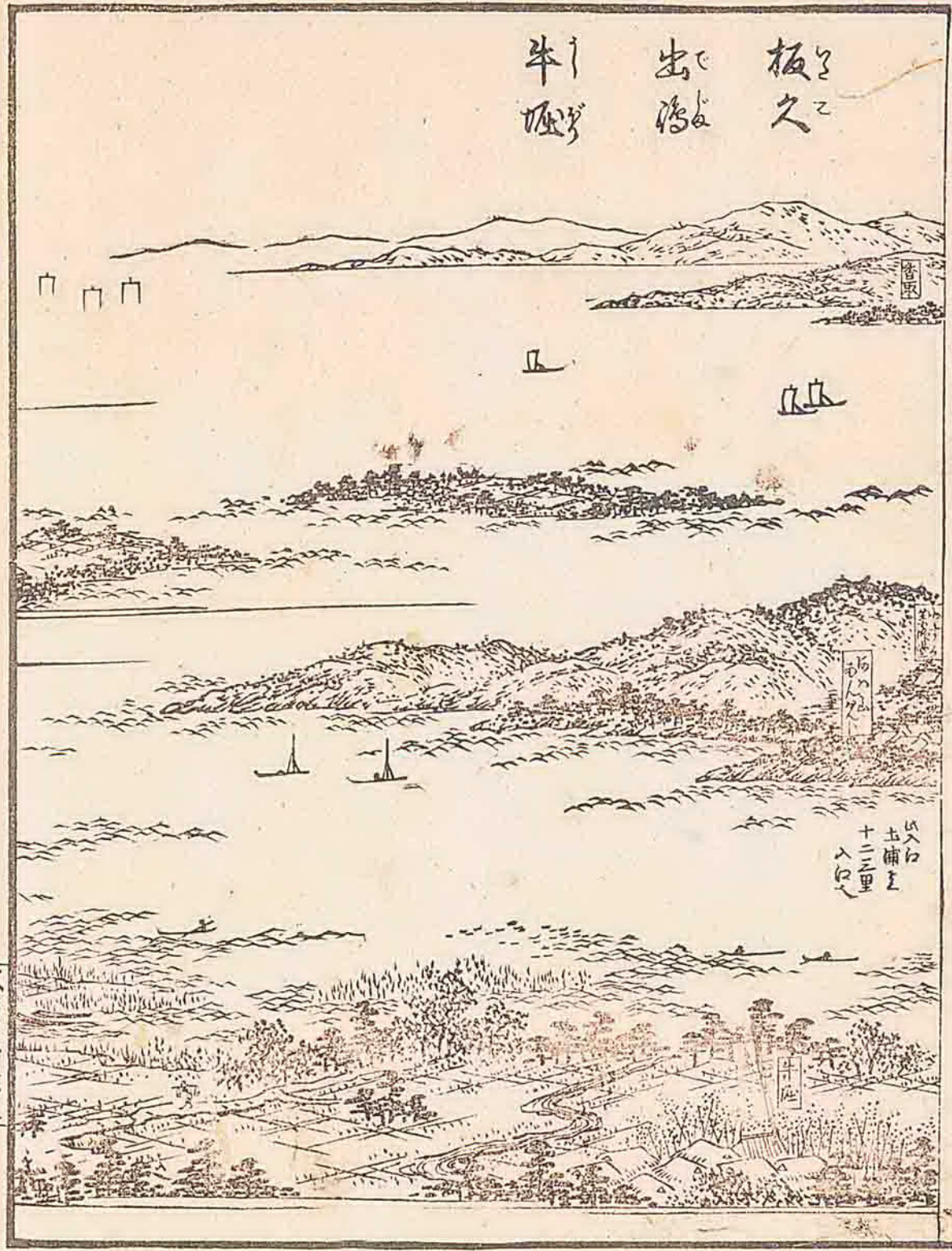
りけ所も又あふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて

都念の地とありてあふあよりいりてあふあよりいりてあふあよりいりて

ありむりて常陸大板平國常の長一よりいりてあふあよりいりて

常陸板久

板之
出
牛
坂

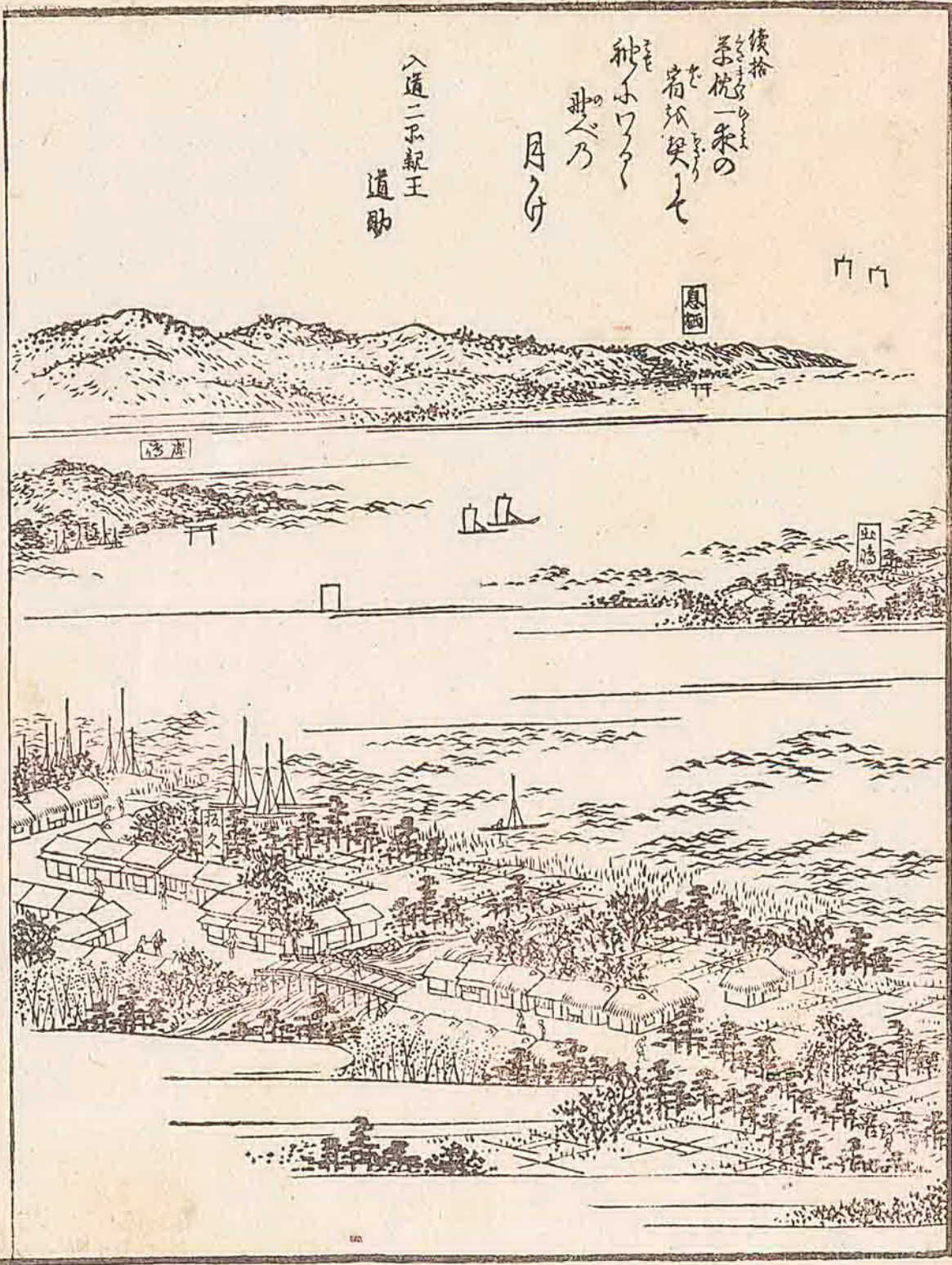


土浦
十二里
八里

水戸
三

後拾
系枕一采の
宿城
秋乃
月乃

入道二
親王
道助



常小煙
陸

いさやういさやうと小煙のちりり入場ふふのく口は案内をきくとして
 先ふふりりいさやうと山とわがた石炭をを越く事ひさしく日
 と山の端ふりれくくかれを御提灯とたふりいさやうなる可
 りまきと木村氏よりいさやうとわがた案内の人と道筋をへく服及
 入替をいさやういさやうとはくく降り道とくく山家とわがたき所
 りまきと山小煙の里よりいさやうと波山の無麻よりいさやうと道筋の人のをへく
 りまきと案内をきくふ五六町もいさやうと山里の酒家なりわがたき所
 と来客ありとて止る子持より又降へくくわがたき所とて止る
 又降へくくわがたき所とて止る子持より又降へくくわがたき所とて止る
 十二塚までき里小煙の宿にきくくいさやうと茶の茶より降へくくなるまき
 杖もきくくいさやうと成道とをきくく風吹く夏茶袋が通る
 雨降くくく林より側本法雲寺より梵文ありは門より波波山から



系神 伊弉諾尊

女群幸社 尾草小結座に

系神 伊弉冉尊

日讀尊社 月讀尊社 素盞烏尊 蛭見尊 共小座に

二神 幸原 道成より 女群幸社

千手窟 山嶺に

鸕鷀石 あり

安座石 洞山徳盛大士 持念のうへに

白雲滝 女群の山回りに

美那濃川 男群の山中に滝あり

後撰 けくぬの峯より流るる川の意をけくぬと訓せしめたり

新撰拾 小泊瀬の花よりわやまの長河等より流るる水乃より流る

後撰 けくぬの峯より流るる水乃より流るる水乃より流るる

新撰拾

美那濃川 峯より流るる水乃より流るる水乃より流るる

正三院 系系

後撰

常より流るる水乃より流るる水乃より流るる

大御堂 流波の山下にあり

幸より千手観世音 千手の座より出現の

三重塔 大日如来に

洞山居 洞山徳盛大士を

薬師堂 安に

老子堂 聖徳太子に

求聞持堂 御小座に

聖天宮 山の方山間に

釣鐘堂 日所に

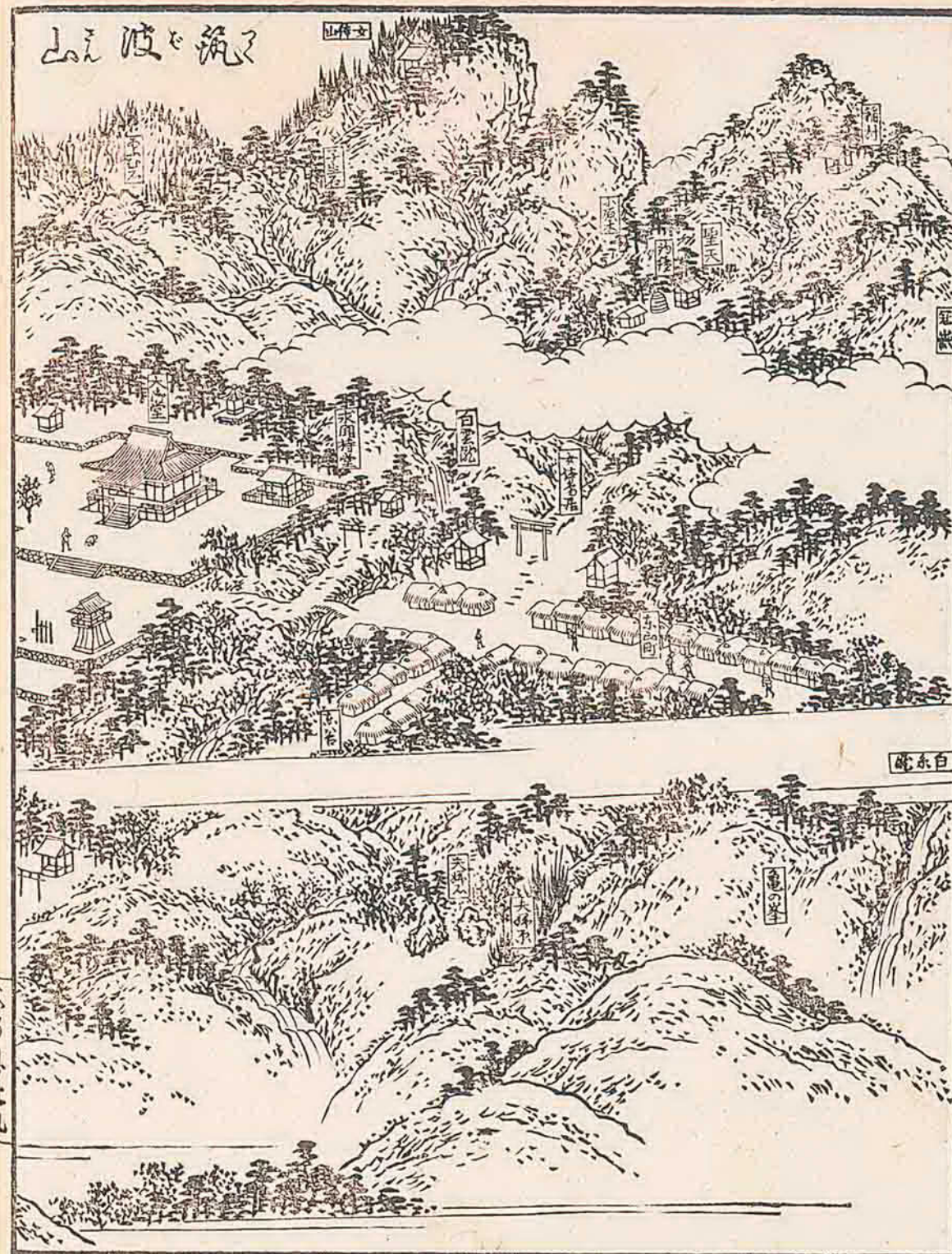
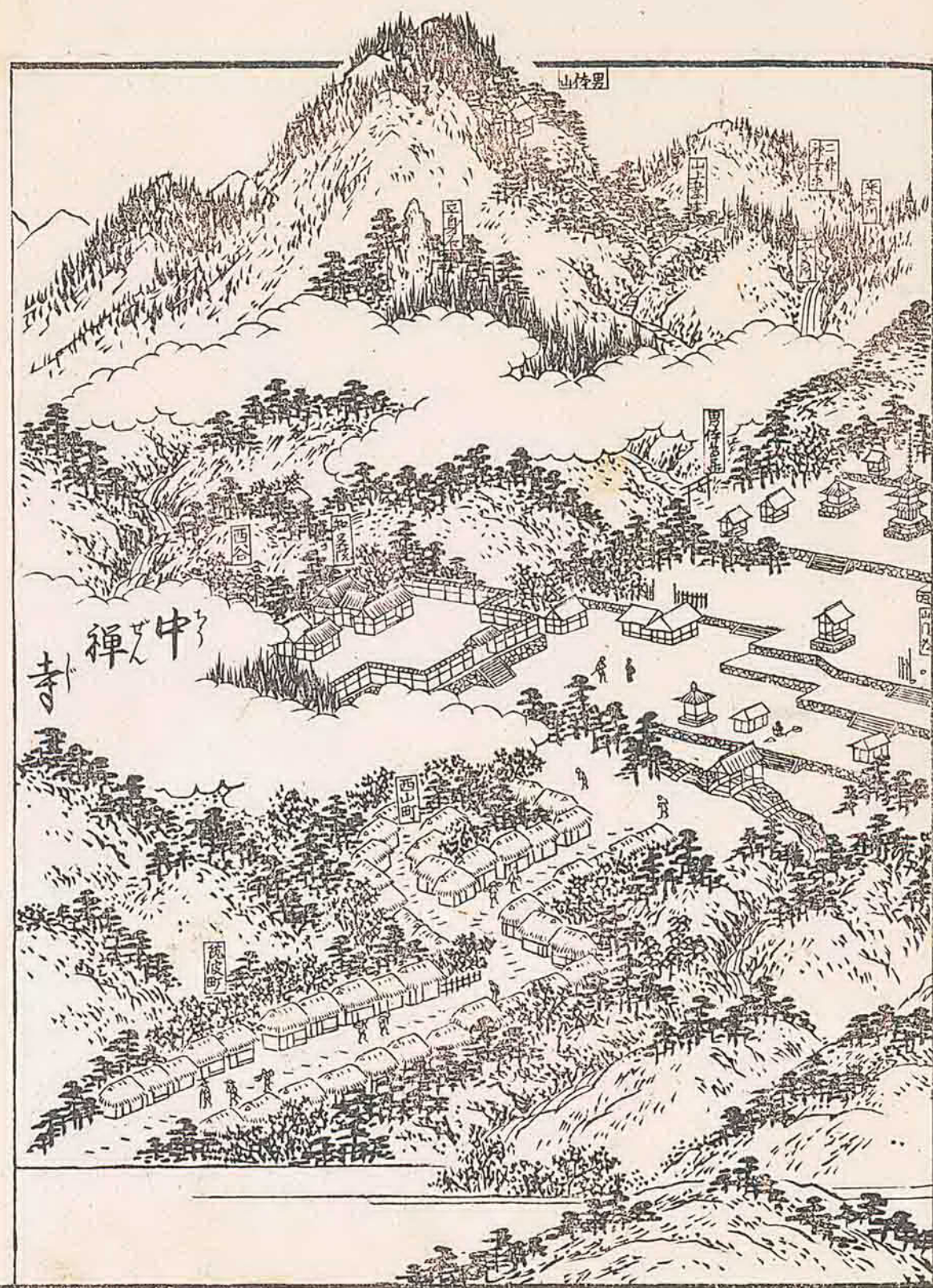
男群島居 山の方山間に

女群島居 女の島に

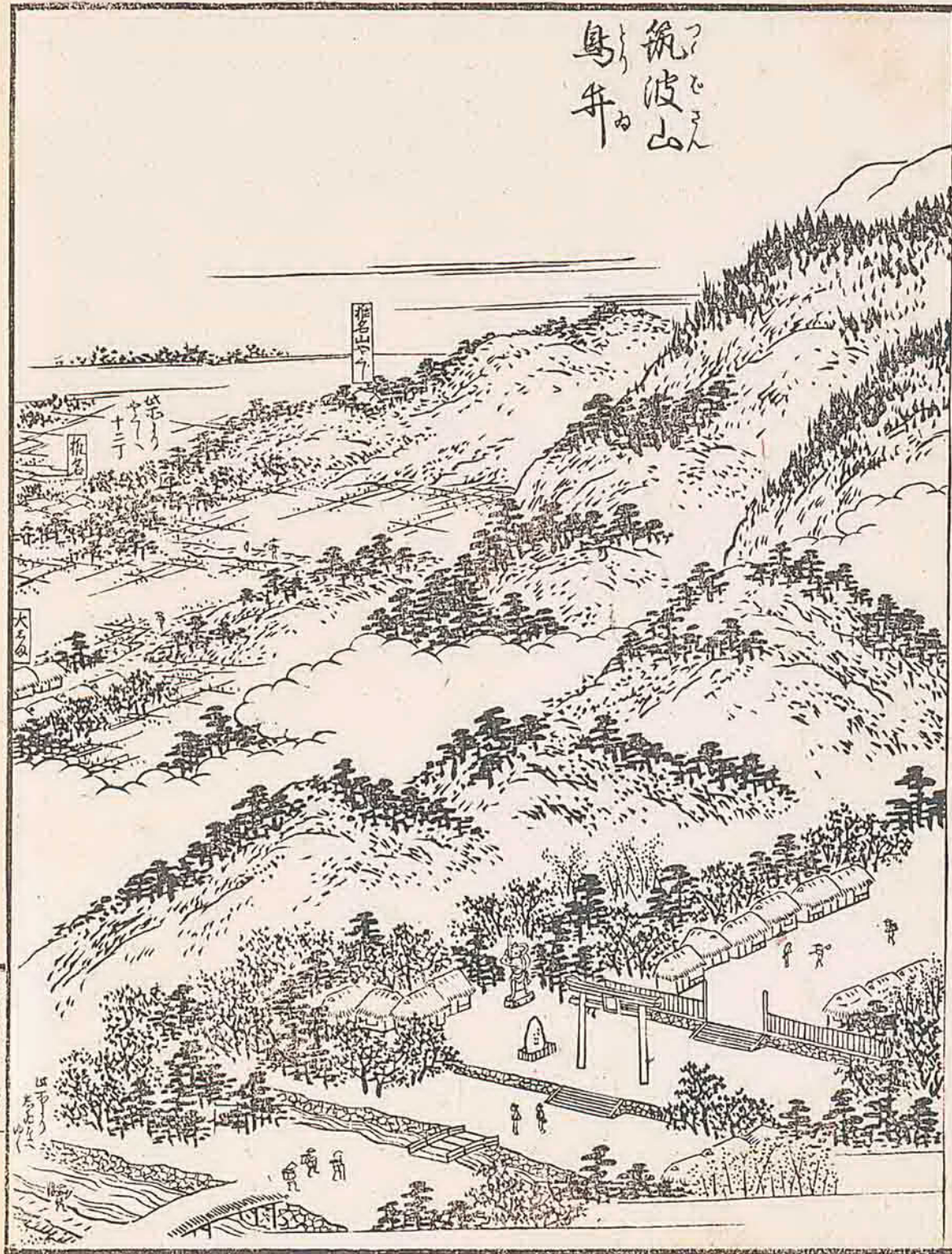
まけしは京幸名筑波と書といゆ東海運流して波なる海
 板小堤防を築くお供に遊ふこれより山と築波や書い人衆て
 筑波と名づく二神登山よりく水波を産む海に返けり
 寺より系を承りて後人皇又十代桓武帝の時法相の名所徳
 匠大士けりよまるとこれ寺とて山より二柱の御神と勧修し其外
 御子四柱の御神徳ありや千手千眼の大尊乃る像あり
 此より奇特天鼓舟達し浪波下より神田三千町を流すなり
 神殿佛國境内にありて豊とて造りしより板小大士自千手
 観音形跡にて男侍女侍の布地佛より其後弘仁年中弘法大師
 あふ登りしより観音の尊を築きよまると此の尊を産む海に返けり
 真玄秘教乃る霊場とて兜率の内院に比し補陀洛とて貴いなり
 男侍女侍の衆より山より一院の境なりとて筑波那波川や

小畑 とが
 法雲寺 ほううん
 筑波碑 つくばのい





筑波山
鳥井



常陸
推名

号にこれ女宮の神の霊泉とれども、
 和合の流まゝなり、
 東開宮家の神降依あまの月、
 霊嶽まゝおの道の神と仰ぐも、
 山中深き五層山の西南隅、
 山中小星草の本より、
 号にまゝ京に寺あり、
 房よりふもあまのまゝ、
 恵み形なり、
 一鳥居、
 雲をゆくさだまのむねの筑波山、
 小桑中や四里半、
 道より見ゆるふたたび、

小栗野

氏居とく又所系ありつれも旧ト云ふをりて同登まづ川を
はけ川を常流下所乃國界あり程あり小栗北里泊ふ
其國中を二里八町小栗より馬どろて野尻まで日わよけまば
酒のなぐ馬隼の小銃ゆ成ゆわつて乃松れげふまきて
四里ひるまでりせりふ嵐さあぐ々ぞたひりて藤下屋敷
さ袂にぞくあぢもひり叔齋音陽のをにへーまを二春乃び
を所許由が頼川の月小住一あばう一軌の器をけーとこひ
せれく程をわくまふふく

真岡野

小守登中を武里八町は真岡て所を名うて中細と本郷を
さし白くくあふ東門あこの服本用由そ成真岡本郷と云
は所と近隣の村あ乃給合れ地をわくあひの店より又販食人拍戸
も見ゆり白虎通ふ其貨物遠近ふあひ四方本通とて今を漲む
る種瓜あ人も人ふ危蟲と陶本あり時天下の中四方本貨物と

通して交易を所産産物千金成紋に自給と陶本公と号
位ふある所と近相ふあふ唐人あつた千金の主とめと自負と
わくひくは地を辭進佐とわく又所系あり先見と忠康とと馬
借りて紫月とてりくふ茅やとてた草蒲の花咲とてねと夏松
草通ふより一武里もねども人あもねくは馬隼ゆけ所六陸奥
までもねくしてねく四十好里とりりてふ休や下野の店あまふ
よねねんと思つた人里も見くば下腰中不頼ふくをと休ん
休束の人もあつたを樹林もねく竹林もあふ平泉芳きねと運を
わく周外の進練流のな給あつたなりりてあ逢ふとふ先
が川定馬ふあふい後逢ふとつたあふ所小栗志ねとゆとね
人をさたふやばあね乃あつたを好後にあひとせひとねとね河
のてふいふあは河原を流く一利根川ふ流をふとこは川を
越く小守登て所より一ねは道回時よりあ所へあつて草鞋

小字屋
野

然れど源去小豆の合率ありていと艱難して少くはなる

宇都宮中を武里半に街を平地なれどいづれ泥所くふありて乃小
湍よりあやむ所不々陽あふび目小なるおるまゝぬききぬ水吐

とまふねくはふあふするものつぎれ落葉の末月半の流るる

きくせふやきく二一の二十四葉あつふきく共小畑よりあなる

道をあはは愛のうけせぬくうはくやいんきのふふひく

今や思ふ我身老る今成むくやさば我る落葉くやうく

こせり行なふ助けらるるけむさるるもわくうくうて宇都宮

みづる

宇都宮
野

あねる日光まで九里城下の半より西へり又江戸まで廿里奥列
白河まで廿里半十二河仙基まで六十里

は所乃疎る戸田園懐守度うて七万七千八百石を蔵せしは色

初云の地うく方のあはありて後所より勿論江戸の奥羽

宇都宮大明神

宇都宮市中

祭神大己貴命 例祭九月九日

下野十社神

幸殿のちあり

神楽殿

あやのち

拜殿 幸社のあや

左右回廊

神馬舎

幸社のちあり

猿田彦社

へは石階のちあり

天神宮

日下石階のちあり

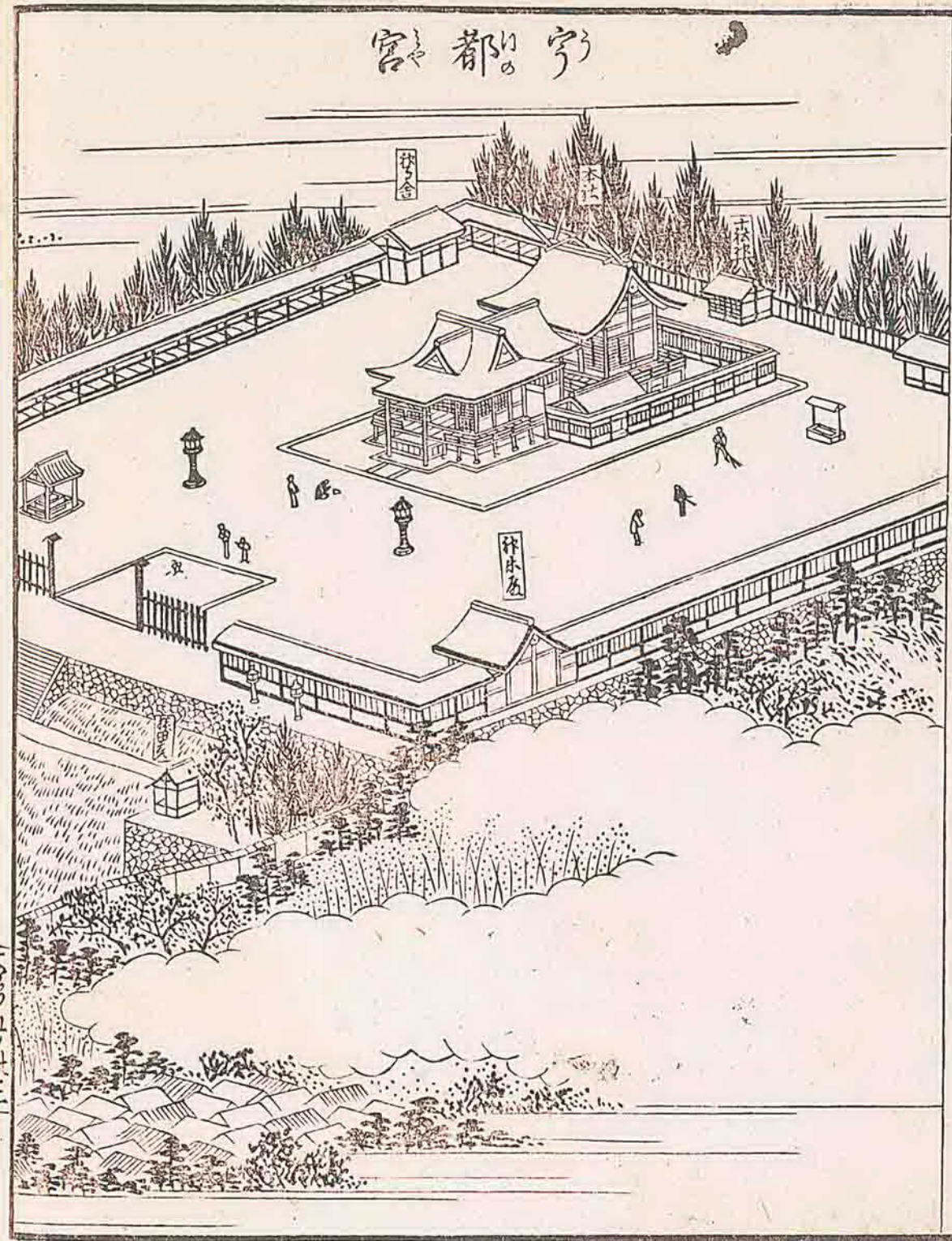
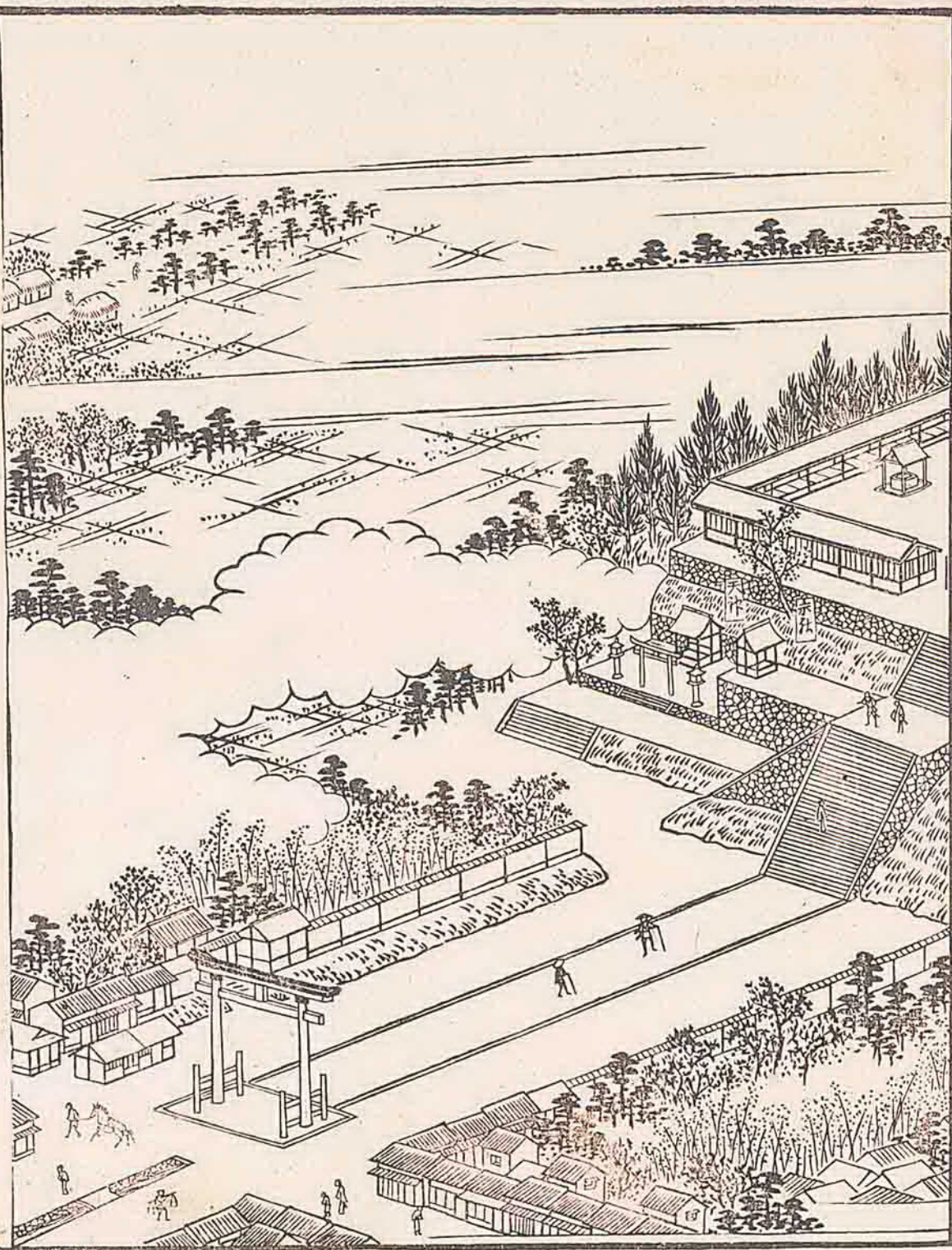
観音堂

門前中河あり

宇都宮の飯食人を之ゆく所乃半より右の旁へり日光道に右の

道より老松乃並樹成て道を度ふつうおれを暑みをは本林を

通て涼し世沢よりふはひ成るるは徳澤希て一紙よりなるいふを



寺に學校と建く和隆の群書秘藏先儒書々々墨印佛書々々朱印
と押金沢文庫乃四文字秘藏書又菅原源成氏小至り大々金沢
も頗るて書籍もみからるく又文庫も名ものありそなり
新よりて近世は學校も二要和書より又傍より足利の書を携く洛東
一宗寺小僧も二要頗る才辨ありて 將軍家も伺候に世乃人
これに學校と号に付 官家より植字一萬字と所寄附あり足
利の學校も住持とる僧に縁念建長寺に傍たり今も學校と稱ど
某後僧侶終五十六人ありとあり儒書武勅學に付所廟も社領百石
官家より所寄附は聖堂と寛文年中に戸より所建立ありとて
聖廟乃東の方に見えあれく客殿あり中北正面小書所を安に又其
西小 國初將軍北所位牌あり
學校の東隣小虚空庵寺あり又寺中堂古一西の方小島ありと氏
乃城跡ありやう足利の所を廻れば大にあり澄ら頗るつてこれ足利の

間をづつたより下野上野の國界なりとせば川上足利より二里半奥小
相生との所あり所と所とを多く織中なり相生と所の名よりて戸
乃比諸國へ比地よりあり

上野
太田
野

足利より上列太田へ半里八本も里を回すや一里半を回す
本寄へも里三十町

右平記云く上野の
上野國乃何人新田小寺郎義貞より八幡寺郎義家十七代の後
亂源氏家嫡流の名を承け知ても平氏世よりて四海のみ威小然る
折つる力をかゝる國東の伴氏もはるく金割りのかゝるもあはれ
つるさふいなる所ありとある所執事新田入及義田等近付
てきいなる所ありとる所平家源朝家にはるく平氏世とて
とる所氏ををた所源氏上城あり日平家と種を治む云々

不肖ありし人も當派はとて後代馬鹿の名にけり
御ふ今相持入乃のり孫を思ふも滅亡遠くふあはれ
居るて我をわげた給の意様成中とあまんと存むるが勅令成
まぐさや向ひつねに船回入道とて大塔宮とて道の山中にあり
て所をみるれを我も方候をたぐしてとて今言をり出せ
や幸座をげふ外等して夢の如く後所を居る其翌日船回
おれが意様成二十餘人野伏のすくふあつてせくお中ふづき
の事へ世我身と成り勢のまひなりておちた方ぐれお進つ
ふのす時なり同士軍成でさつりたるうさう勢の都乃野伏
どもおれをさくは方れお成とてお力と合せんふお好成の事
よりとて合を迫つたなりお船回が勢の中にとりあつて十一人
すで生捕てなり船回け生捕どもおぬゆりてむそふゆける

今海軍成なりつてあつてる幸今も成せんふあはれ船回成幸
へつりて海軍をよんとておふ合言あつてけつあつた海軍ふ
大塔宮の御在所成なり同んふあはれ捕はる合勝る案内ふ
してけ方の便をはさく官の所をあるとてとてお船成は
ちたお成ひく其意様成とていふと安ふとて幸めふは中に一人
おけのりてお成なり今言をり出せしとてお成なり
十人をさるお成人官の所方へとてお成なり今やとて相持なり
一日ありて今言成なりとてお成なりとてお成なりとてお成なり
あつて論旨の文章に書れり其詞いふ
論言成なりて日記を我萬國を歴する明君乃徳なり礼と治
る四海を結むる武臣の節也頃幸の同高時法除る一教朝憲成
なりが成なりとて思ふに遠域を極る極意のなり天孫降ふなり
爰小東幸の宸様成なりとてお成なり一筆の義を起んとて

敵感む海、忠賞何ぞ浅く、早く周東征伐の謀をめぐり、
天下静謐の功、功績を著し、者、綸旨を以て仍執達す。

元弘三年二月十日

左少辨

新田小左郎殿

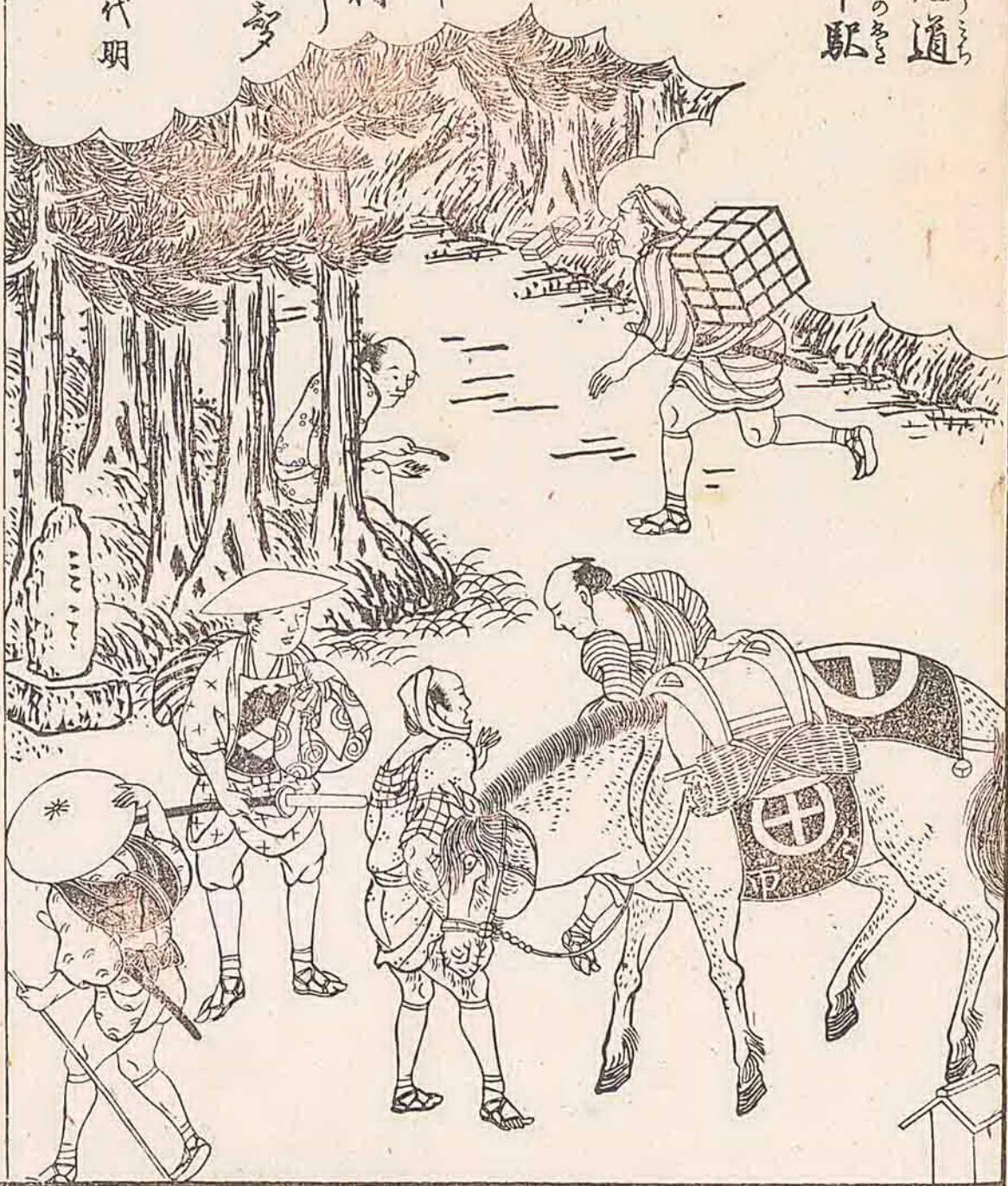
綸旨の文章、家の眉目、小左郎殿、これに編み、あれば、義貞、斜に、
其望、目より、虚病、して、意、先、帝、國、を、り、れ、る。

山の西、南の方、小義重の寺あり、大光院と云、寺、从、二百六十石、附、く、
寄、も、寄、り、る、と、い、け、り、これ、村、也、小義貞の一族、家、之、乃、左、名、多、く、
山、を、さ、田、の、禁、に、あり、服、屋、也、を、田、乃、西、本、傍、の、山、あり、を、像、塚、と、云、
の、事、も、小、所、り、世、良、因、に、田、由、良、大、被、い、た、田、と、本、傍、此、田、あり、世、良、因、と、
道、の、之、り、小、あり、大、村、あり、大、被、と、世、良、因、乃、事、あり、に、田、に、三、村、あり、
中、に、田、と、道、の、側、あり、由、良、も、道、の、と、に、かり、大、井、田、に、河、川、も、け、
急、ふ、所、り、み、ふ、これ、義貞の一族、家、への、位、せ、り、を、訓、し、

日光道
今市駅

松の精
鳥乃夢

永代明



千載 ととね
 め月ぬき雲乃ハ橋張見たりそはそつゝ波のうようやまの

陳乃能
初居

新古
飲處あそぶところ
ち
中へ渡りてん

敬重

新勅撰
系上
萬々
乃燒火
を
種
と
見
え
宜
し
入
局
も
納
め
ぬ
ハ

定家

續古

7

[illegible]

一

[illegible]

後

いふやうな言ひで、
あつたらう。

卷八

東條のむすねは昔のたてしほそと常盤の所
ひち 中土 八ヶ 奥へ

降源

[illegible]

僕人志すに
ひちのやうに

け地より光より小ふ物を通より道の壬生とより新ふち

一室八景

より平抄と云ふと云ふ紙通らず様本へ引か金橋より

極本一

小念戰場を通りて、冥橋之上を十里をうろのする

1

合張場より採本中で壹里

野
金の八島と合戦場乃通ふあり

標本しほんよりより富田とみだ、式里

楊志野

えんご 名寄
宿田より大伏まで三里

富田

いど豪家乃其^{かうき}
 うな木^{うな}を対^{たい}多く植^え
 う所の間の道^{あひだち}ひろ

[illegible]

の
もとの
後
三つ
成る

あふたをぞ
ふか
さへ

天明

同く中を慶し又裏田もなり田の度肌堅實とて草刈本にふ

のりば地の生土井より喜国匠寺とく通筋より雲内ふ寺おめ
 ずるをむろがくろふん
 くらふん
 くらふん
 くらふん

僅昔駿河乃之能く日光山へ移りたりと云々靈機ひきく

一宿御遠為あり故ふけ寺より御位牌あり寺宛五十石なり但し

今の檢査も五百名をうりも有るゝと云ふ天啓をせむゝと

432
175

